

(二) 盤珪和尚ばんけいおしょう

盤珪和尚

中国ちゆうごく禪宗ぜんしゆうの始祖しそだるま達磨だつまは、壁かべに向かつて九年間くわんねん座ざり続つづけたと伝え

られますが、盤珪も若いころ、長い座ざ禪ぜんを行なつて死しにかけたことがあるといわれています。盤珪は、一六二二年（元げん和八年）現げん在ざいの姫路市ひめじ網干区あほし浜田はまたに生まれましたが、十才じゅうさいで父ちちに死別しべつしたのち、母ははの苦勞くろうによつて育そだてられました。

地元ぢげんの先生せんせいについて、『大だい学がく』を学まなびましたが満足まんじつできず、『大だい学がく』の明徳めいとくを明あらかにするため、寺てらに入る決けつ心しんをしました。当時たうじは、勉めん強きやうがしたければ学がく識しきのある僧そうの教きやうえを求もとめるよりしかたがない時代じだいでした。

赤穂あこうの随ずい鷗おう寺じに入い門もんして修しゆ業ぎやうを重おもね、各かく地ちを回まわり、同どうじ赤穂あこうの興福寺きんぷくじで真しん劍けん



不生の額（盤珪書）

な座禪を続けました。死にかけてたといふのはこのとき
のことで、長く体を横たえないでいたため、両ももが
はれあがつて、はた目には息が絶えそうに見えたので
しよう。自らを厳みずかしい修業きびで責め、難行なんぎょうの中から仏法
に安心する心をつかみました。

一六六一年（寛文元年）に、網干りょうもんじに龍門寺を建てま
した。また、京都の有名な妙心寺みょうしんじの住職じゆうしやくにもなりまし
た。盤珪はいつも大衆に接し、その話はできるだけや
さしい言葉を用い、また、かな文字を使って、人々の
日常生活の中に不生禪ふしやうぜんを説きました。龍門寺には、
盤珪の話はなしを聞こうと、千人をこえる人々がいつもつめ
かけたといわれています。盤珪は七十一才で苦行の一生を閉じましたが、その

教えは、人々に大きな感銘かんめいを与え、不生禪の名を長く歴史にとどめています。

龍門寺

讚岐丸龜さぬきまるがめの藩主京極高豊が、盤珪の徳をしたい、敷地を寄進し、

臨濟宗りんざいしゅうの天徳山龍門寺てんとくざんりゅうもんじが建てられました。現在も、堂・塔・寮舎りょうしゃなど二十余りの建物が、当時の姿のままに残っています。境内に一步足をふみ入れると清らかな靈氣れいきにうたれ身も心もひきしまる思いがします。むかしながらにけがれない道場の雰囂ふんいきを、今もなおただよわせています。

大門おおもんを入れて不動堂ふどうどうと経堂きやうどうの前を過ぎ、唐門からもんを通って左に折れると、開山堂という盤珪の廟所があり、盤珪の木像が安置してあります。また、龍門寺の仏像の中には、藤原時代や鎌倉時代のもがあります。

龍門寺の末寺まつじで、不徹庵ふてつあんという尼寺が綱干区浜田にあります。この寺を初めて開いたのは、盤珪の弟子でしの嶺雲貞閑れいうんていかん尼です。この人が

雪の朝 二の字二の字の 下駄げたのあと

の句を、わずか六才でよみ人々を驚かせた、
丹波柏原生まれの有名な俳人である
田捨女でんすてじよなのです。